



©Yuki Nakase

寒いニューヨーク、チェルシーにて



中瀬有紀

旅芸人

ニューヨークの冬が寒いのは今に始まったことではないので、十分寒さに備えているはずですが、最低気温が摂氏マイナス20度、最高気温も氷点下だった週末は、湯舟と洗濯機が繋がれている配水管が氷り、排水が流れなくなりました。知り合いに「どうしよう!」と相談したら、そんなときは気温が上がるのを待つしか手立てがなく、配水管業者を呼んでも現状は何も変わらずに訪問費用を請求されるだけ、と彼女は言います。結局、その知り合いの言う通り、気長に暖くなる日を待っていたら、その3日後には春のような陽気が訪れ、あっというまに氷は解けて流れていきました。その数日後から数カ月間家を離れることになっていたの、水ったことにより体積が増え配水管にヒビが入っていたら厄介だなあと心配でしたが、何事もなかったようで一安心です。

今年前半はニューヨーク市から離れた劇場での照明デザイン仕事が続いています。マサチューセッツ州に始まり、今はコネチカット州にてこの記事を書いています。その後ニュージャージー州、カリフォルニア州、ミシガン州、そして一度ニューヨーク市へ戻ってきたあとにワシントンD.C.に行く予定です。それぞれの作品がほぼ異なるので、ツアーとは違います。それらすべての公演の共通点は、演出家とデザイナー、そして舞台監督が全員ニューヨークを拠点としていることで、彼らと一緒にプロダクションマネージャーが手配する現地の技術者たちと作品を作ります。照明は劇場で働く照明スーパーバイザーがチーフとなって器材の調達から人員の確保、そして仕込みから撤収まで照明チームを先導します。地域ごとに仕事の仕方が異なり、図面提出から何度も確認を重ねても理解の違いが埋まらないこともあります。そのため、数人のテクニシャン、特に照明卓プログラマーをニューヨークから連れて行ってほしいとお願いすることが多いのですが、是非かはプロデューサーの判断で、プログラマーを始め技術者全

般の重要性を説明するのに毎回一苦労します。良い照明は良いデザインだけで完結するものではなく、照明業務は完全に団体戦であり、チーム作りが鍵であると理解し合えるプロデューサーには本当に感謝します。

これから行く劇場のいくつかはリージョナルシアターとカテゴリーされる劇場で、ブロードウェイから独立し地域に根付いた演劇活動を行う非営利団体での公演です。過去にリージョナルシアターで仕事した作品のうちいくつかは、最終的にブロードウェイ劇場とオフブロードウェイ劇場を含むニューヨーク公演を目指していて、そのうち2作品はその目標を達成しました。確かに、ニューヨーク市へ作品をもっていくことは作品に関わる制作者にとって素晴らしいことで、なにより多くの人に見てもらえるという利点があります。ただ、すべての作品がブロードウェイを目指すという一辺倒ではなく、新しい作品の実験的な公演や、ニューヨーク市で発表された作品をニューヨーク市以外の地域の人にも見てもらおうという目的の公演もあります。今コネチカット州のリージョナルシアター、ロング・ワープ劇場でデザインしている作品は、2017年にニューヨークのパブリックシアターで初演を行った『タイニー・ビューティフル・シングス』という演劇のリメイクです。台本には、オリジナルの公演のとおり、リビングルームを設定すると書かれていますが、演出家のケン・ロス・スクモール氏は設定を民家の裏庭に変えました。90分足らずの上演中に裏庭での日没から日の出までを演出するのが私の照明デザインへの課題です。

家を長く離れることは精神的に少し負担で、やっぱり家の布団で寝たいですし、このような生活から脱して事務業に転職する家庭もちの友人たちの気持ちが痛いほどわかります。ただ、毎回新たな共同制作者や作品との出会いが私を成長させていることが明らかで、ああ、やっぱりこの仕事はやめられない。